Osaka University Knowledge Archive

Title	語りのグループ・ダイナミックス : 語るに語り得ない体験から
Author(s)	渥美, 公秀
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2004, 30, p. 160-173
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7971
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

「大阪大学大学院人間科学研究科紀要」第30巻, 2004年 3 月所収

語りのグループ・ダイナミックス
—— 語るに語り得ない体験から ——

渥　美　公　秀

語りのグループ・ダイナミックス
―― 語るに語り得ない体験[1)]から ――

渥美　公秀[(1)]

1．はじめに

阪神・淡路大震災から10年近くの年月を過ごしてきた。震災の体験を伝えていくことは、犠牲者の方々の鎮魂はもとより、生き残った人々の防災に対する対応を引き出すことへとつながらねばならないと思う。筆者は、遺族の方々との協働想起（渥美，2003c）に立ちあう強さを持たないと自覚する。体験、伝承、鎮魂、防災と並べてみたところで、震災で亡くなられた方々やそのご遺族の想いについては、その一片たりとも代弁できるものではないし、そこには、語るに語り得ない、言葉にならない想いがあろうからである。しかし、震災における救援活動（渥美，2001）やそこから導かれた防災につながる活動（渡邊，2000）について、自分の体験を伝承していくことは、筆者自身の責任や義務であると感じてきた。

では、かけがえのないこの私の被災や救援の体験はどのように伝承され得るのだろうか。そして、そこからどのようにして防災を問い返す動きを導くのか。残念ながら、その具体的な方法は未確立である。まずもって、自らの体験を語るという場面を見つめ直すことから始めなければならない。

本研究は、現場体験の語りについて、グループ・ダイナミックスの立場から検討するものである。具体的には、「語るに語り得ない」という現象に立ち入り、「語り得ないけれども語っている」という場面が集合的に成立していることに注目し、そこに語りの型（ドミナントストーリー）が介在することを確認する。そして、集合的な現象としての語りを変革するための方途を探る。最後に、ドミナント・ストーリーがもつ理論的、実践的、方法論的意義を、グループ・ダイナミックスの立場から簡潔に整理する。本研究の背後には、「そもそも現場で体験したことは、報告可能だろうか？」といった原理的な問いがある[2)]。本研究は、ともすれば安易な現場偏重主義に陥りがちなボランティア研究の現状への疑問符でもある。

2．語るに語り得ない体験

自己の体験を表現しようとすると、何重にも重なった「語り得なさ」に出会う。まず、

(1) 大阪大学大学院人間科学研究科（ボランティア人間科学講座 地域共生論研究分野）

浅野（2001）が指摘するように、原理的に語り得ないという事態がある。浅野によれば、自己物語においては、「物語る自分」と「物語られる自分」との間に同一性と差異性が同時に求められる。つまり、語り手としての自分と登場人物としての自分は、視点によって異なっていなければならないが（視点の二重性）、自己物語である以上、その視点の持ち主は同一人物でなければならないのである。この自己言及のパラドクスによって自己物語には未決定性、あるいは非一貫性といった性質が生まれる。この未決定性・非一貫性を浅野は「語り得なさ」と呼んでいる。従って、自己物語は、「物語り得ないものを前提にし、かつそれを隠蔽するもの」（p.14）となる。

次に、実践的に、語るに語り得ないという事態がある。例えば、災厄の体験は、語るに語り得ない。災厄の体験（例えば、戦争体験）の語りは、「動かしがたい個的な体験を語っているのではなく、語れば語るほど個的な領域が解体してしまう不安定な発話」（冨山，1995，p.104）だからである。一方、Atsumi（in press）は、ボランティアの動機について、ボランティアが語るに語り得ないと感じていることを指摘し、それは心理学者が、過去志向的に活動の動機を問う場面に誤謬があるからだと主張した。Atsumi によれば、活動の動機は、聞き手との協働的実践の中で未来志向的に紡ぎ出すしかない。つまり、「あのとき－あそこ」における体験は、他者と協働する将来に向けての「いま－ここ」の文脈を外れては、実践的にも意味のある語りとして語り得ないという指摘である。

ところで、語るに語り得ないはずの自己物語は、広く語られている。語り得なさは、他者の承認（浅野，2001）や聞き手との協働的実践（Atsumi，in press）のあり方によっては、隠蔽され得るからである。そこで、以下では、語るに語り得ない体験をキーワードとして、語りを支える集合性とその変容・変革について、グループ・ダイナミックスの立場から理論的に整理し（３節）、語りが集合的な現象であることを示す研究を紹介し（3-1）、続いて、語りの変革へと展開し得る語りの型（ドミナントストーリー）の存在を見いだした研究を概観する（3-2）。最後に、ドミナントストーリーに注目することの理論的、実践的、方法論的含意をグループ・ダイナミックスの立場から簡潔に整理する（４節）。

３．グループ・ダイナミックスと語り[3)]

グループ・ダイナミックスは、集合体の全体的性質（集合性）のダイナミックスを明らかにする人間科学である。グループ・ダイナミックスは、伝統的な内面－外界図式と訣別し、社会構成主義に依拠する。研究者と当事者との間に一線を画すことができないということを公理として、参与観察を中心とした方法によって、研究者と当事者が、現場に対して何らかの変化をもたらすことを目指した協働的実践を展開することがグループ・ダイナミックスの特徴である。

一方、グループ・ダイナミックスは、実践を志向する計画・物語科学（渥美, 2003a）である。つまり、グループ・ダイナミックスでは、対象とする場面において、そこにいかなる法則があるかということを認識することが目的ではなく、その法則のもとで、当事者との間で協働で紡ぎ出される目標をいかにして実現するかということを志向する。グループ・ダイナミックスの立場に立つ研究者は、実践の現場にあっては、ある時点まで暗黙かつ自明であったことを問い返し、新たな問いを集合的に醸成し、その問いを錬磨する。

従って、グループ・ダイナミックスに基づく研究は、二段構えとなる。まず、対象とする現象が集合性に支えられていることを示す。次に、その集合性をいかにして維持ないし変革するかを志向する。語りを対象とする場合には、まず集合的な現象としての語りに注目し、その維持や変革を検討することになる。

グループ・ダイナミックスでは、語りをデータとしてもっと広く、深く扱うことを提唱してきた（渥美, 1996）。その際、語りの様式（Bruner, 1986, 1990）やジャンル（バフチン, 1934-35/1996 ; 1963/1995）にも注意を払う。これは、対話のスタイルやジャンルに注目することによって、そこで暗黙かつ自明の前提とされて表明されていないことが析出され、その結果、その対話の集合性が雄弁に示されるからである（渥美, 2003c）。ボランティア活動を研究する場合も例外ではない。例えば、ボランティアの動機を分析した研究（Atsumi, in press ; 星子, 2001）は、当事者と研究者が紡ぎ出す語りに注目している。

こうしたアプローチは、隣接する諸分野の動向とも一致する。共同想起（Middleton & Edwards, 1990）、超常体験の報告（Wooffitt, 1992）、ナラティブ・セラピー（McNamee & Gergen, 1992）、ライフヒストリー（中野・桜井, 1995）、ライフストーリー（桜井, 2002 ; やまだ, 2000）、オーラル・ヒストリー（御厨, 2002 ; Thompson, 2000）、供述分析（浜田, 2001 ; 大橋・森・高木・松島, 2002）、自己物語論（浅野, 2001）、さらには、医学臨床（Greenhalgh & Hurwitz, 1998）など枚挙に暇がない。

これらの諸研究は、語りの構造を静的に捉えたり、語りの生成の現場を記述したりすることによって、語りが集合的な現象であることを示唆する研究と、語りの現場を構築し、その場における語りを推奨していくことへと連結し得る研究とに分かれるようである。本節では、それぞれについて、いくつかの研究を採り上げて検討する。

3-1 集合的な現象としての語り

語りが集合性に支えられた集合的な現象であることを示した印象的な研究（松島, 2002）がある。松島（2002）は、記憶が個人の身体内部に貯蔵されているのではなく、想起という行為こそが記憶であるという立場から、断酒会の事例を報告している。断酒会の語りを観察したところ、過去を過去として確立するために、過去を確定的に語り続ける姿があった。「飲んでいた」過去を過去たらしめることは、「飲まない」現在を現在た

らしめることと等しく、断酒者が断酒会の場で自らの過去をはっきりと語り続けることが、彼ら断酒者の自己のあり方にとって意味がある。「過去の私」を想起することの意味は、それが「現在の私」ではないということを認識することにあるからである。断酒会でなされているのは、ただ「想起し続けること」であった。

この断酒会の事例を発表すると、心理学者から次のようなコメントがあったという。すなわち、「同じことを何度も繰り返して話しているだけなんて愚かだね。彼らには『学習する』という能力がないのかね。」というわけである。確かに、心理学的には一見もっともらしい感想ではある。なぜなら、語られることなくただひたすら貯蔵されるだけの記憶などというものを措定し、人は、その貯蔵庫からの引き出しを無時間的に行っているのだと想定すれば、“同じこと”を“繰り返し”語っているだけだということになるからである。

しかし、松島（2002）は、この言説を「本質的な誤り」だと糾弾する。断酒会の人々の想起には、その場限りの「現在」という時間の中でこそ生成される「過去」という時間の独自性と唯一性があるからである。過去は想起の現在という場において「生成されるもの」であって、自己の内側に「とりこまれる」ものではない。

ここで、必ずしも松島（2002）が強調していないが、グループ・ダイナミックスの立場からは、是非とも指摘しておきたいことがある。それは、「ただ想起し続ける」ことが常に他人（i.e.,　断酒会のメンバー）を前に行われているということである。つまり、ここで想起という言葉を用いるとしても、それは決して個人が、いわば孤独に思い出しているということではなく、他人の前で、他人とともに、想起という協働作業を行っているということである。従って、「ただ想起し続けること」とは、正確には、「ただ協働想起し続けること」である。ここに、集合的な現象としての語りを見ておきたい。

また、語りの現場では、参加者の相互承認が行われていることを確認した研究（加藤・渥美・矢守，2003）がある。加藤らは、有料老人ホームにおけるロボット介在活動（RAA）への参与観察を行った。具体的には、25回にわたって、毎週１回約１時間訪問し、ペット型ロボット AIBO（SONY　ERS210）を用いた RAA を実施した。その際、デジタルビデオカメラを用いた定点観察、観察記録の記述、施設職員へのインタヴューなど定量的、定性的なデータを収集した。RAA の現場で生じている事柄を定量的に表現する方法を開発（渥美・加藤・矢守，2003）して分析した結果、AIBO の動きとともに、参加者群が AIBO を見て会話を行うという行動の定型がみられ、回を重ねるごとに、参加者の行動が定型化する様子を記述することができた。続いて、RAA セッション中の観察記録や施設職員への半構造化面接結果を整理し、ビデオ記録に基づく、参加者群の会話内容・挙動の整理・分析を行った結果、参加者が、AIBO に対する「心の読み取り」を実施していること、そして、AIBO の挙動に対する、参加者全体による解釈の共同的承認が行われていることが見いだされた。すなわち、AIBO への「心の読み取り」を契機とする「物語」生成があり、対象者は、AIBO の挙動に対して「解釈（心の読み取り）」

を行い、AIBO/RAA に関する「物語」を語り合っていた。しかも、AIBO の挙動への解釈を、参加者個々人で行うのではなく、集団内で語り合い、それを「共同的に承認」(麻生, 1996) しあうことで、「物語」を、共同で、生成・継続・強化・変容させていた。

語りの現場では、話し手と聞き手との間で絶え間なく承認が交わされる。そして、承認を得るためには、ある社会の中で受け容れられやすい定型的な物語(ドミナントストーリー) に依拠することがある。これによって、語り手は自己物語にあるパラドクスを隠蔽し、容易に他者の承認を得ることができる。しかし反面、自分の体験を既成の型にはめることによって、語り手の体験の独自性・かけがえのなさは失われ、どこにでもあるような出来事に置き換わってしまう。そこで、次項では、語りの型を見いだした研究を紹介する。

3-2 語りの変革へ

語りに型が見られることは、いくつもの研究から示唆されるが、ここでは、超常体験の語りという印象深いテーマの探求に見られる型を抽出した研究 (Wooffitt, 1992) を紹介する。Wooffitt (1992) は、超常体験の報告パターンについて会話分析、社会構成主義の立場から検討した。この研究では、人が異常な出来事の想起を描写するときに、ある仕掛け・装置を用いるということが報告されている。具体的には、「ちょうど X しているとき……そのとき Y」という装置である。X には、平凡な事柄が入り、Y には超常的な事柄が入る。例えば、ちょうど電車を待っているときに、身体の感覚がなくなったり、(葬式で) ちょうど棺を見つめていたとき、(死んだ) 夫が立っていたといった具合である。Wooffitt の主張は、「たまたまその活動をしていて、その後に異常なことが起こったために、その活動が語られるのではない。むしろ、そうした活動は、その後に起こる出来事によって意味づけられる話し手の体験の特徴を高めるために描写されているのである (p.149)」というものである。その後にどういう事が起こるのかがわかって初めて報告する価値のある出来事となり、実際、話し手はその効果を狙って引用しているというわけである。こうして、潜在的には無数にあるはずの報告可能な事項の中から、特定の事柄を選択し、他の描写を排除していることになる。結局、「ちょうど X しているとき……そのとき Y」という装置は、文化的に利用される語りの型だと言える。そして、人々は、超常体験やその他の異常な出来事を説明する中でこれを用いるのである。

次に、災害救援に参加したボランティアの体験記にも語りの型が存在することを見いだした研究 (森崎, 2002)[4)] を紹介しておこう。森崎は、阪神大震災と東海豪雨災害を対象として、発災を起点としたボランティアによる災害救援初期活動の動向を時間軸に沿ってまとめた上で、救援活動に参加した災害ボランティアの体験記を意味内容の区切りで分割し、話題を分類した。資料としては、西宮ボランティアネットワーク (1995) および「思いがひとつに」編集委員会 (2001) を用いた。

資料には、例えば、「1月31日、行き先も決めずにただ使命感だけを胸に、電車に飛

び乗ったあの日からもう２ヶ月になる。ただがむしゃらに走り続けてきた２ヶ月は、自分にとっていったい何だったのだろう」（西宮ボランティアネットワーク，1995，p.162）や、「地域のためのボランティアとしてこれからも頑張れ！そして、がんばろう！」（同書 p.167）といった表現が見られる。これらの「語り」は、別々のボランティアによるものであるが、そこに類似性を見て取ることは容易い。そこで、森崎は、それぞれの体験記からボランティア計８名の体験記を抽出し、意味内容で区切ってひとつの話題ごとに一枚カードを作成して分類した。分類は２名が独立に実施した（一致度 75.2%）。

その結果、２つの災害の間で体験記の内容には違いが見られなかった。むしろ、性質の違う災害でありながら、具体的な事柄以外は全く同じといって差し支えないようなドミナントストーリーが存在していた。さらに、語られる話題とともにその順序に明確な共通点があった。話題は、⑴活動の様子（被災地にきたときの衝撃や、食料供給、避難所でのアンケート調査などボランティア活動の具体的な内容、自分にとって「初めてのボランティア体験」であること、それゆえの戸惑いや驚きがあったこと、活動の中でたくさんの人と出会ったことなど）、⑵活動を通して感じたこと（ボランティア仲間や「人間」の素晴らしさ、若者を見直したこと、活動の中で色々なことを学んだこと、今までの生活と比べて大変充実していたこと、活動を通してボランティアに対する意識が変わったこと、活動に参加したことが自分のためになったこと、被災者の役に立てたことの喜びなど）、⑶今後の展望（自分の活動経験をふまえた今後の救援活動への提言、これからもボランティアをしたいとうこと、および、この経験をもとに自分の生活を見直すといった展望や被災者への応援や感謝の意）の３つに分類され、⑴から⑶へとつながる事によって全体の文脈を作り上げていた。また、文章量は少ないが、例えば、「素敵な思い出をありがとう、NVN の仲間達。輝け西宮」（西宮ボランティアネットワーク，1995，p.162）といった印象的な文章が見られた。

災害ボランティアの体験記に多くの共通点が見られたことは、災害ボランティアのドミナントストーリーが存在することを示している。さらに、５年の月日を経ても、また、地震と水害といった違いがあっても類似したドミナントストーリーが見られたことから、災害ボランティアの語りの型が安定していることが示された。

最後に、環境ボランティアとしてエコツアーに参加した人々の体験記を見ておこう。ここでは、内山（2002）[5]を紹介する。彼女は、筆者らとともに、いかにすれば、自然と共生する生活スタイルを、我々の日常生活の場に埋め込むことができるかという視点に立ち、環境 NGO エコスタイル・ネット[6]の結成と活動に参画してきた。代表の M 氏は、中華人民共和国内蒙古自治区で現地の村人と生活をともにし、柳などの潅木や、牧草の種を植えて砂の移動をとめ、再び緑化する試みを続けている。活動の１つに内蒙古自治区の活動拠点を訪ねる現地ツアーがある。ツアーの現地宿舎が、M 氏の住む村の中にあり、そこで２～３日を過ごす。沙漠化防止活動の現場は、その宿舎からさらに離れた場所にあり、バスで30分、さらに徒歩１時間ほどのところである。

具体的な資料として使用されたのは、内山が２回目に参加した「中国内蒙古沙漠化防止ツアー」の参加者が帰国後１ヶ月あまり経過した後、ツアーでの体験を振り返って書いた感想文である。この感想文は、ツアー参加者12名の内の６名が、「ツアーの参加レポート」として書いたものである。字数の制限はないが、どれも2,000〜3,000字程度のもので、エコツアーに参加した報告書であるということ以外には、形式などに特に制約はなく、各人が自由に書いたものである。

感想文には、ツアーに参加するにあたって「どんなことを感じたいと思っていたか」とか、ツアーに参加して「これからの自分はどうしたいと思っているのか」というような記述が必ず現れていた。例えば、A さんの場合、ツアー前の意気込みとして、このツアーを通して「新しい価値観を発見したい」という気持ちをもっていたということから感想文を書き始め、砂漠を実際に目にして、「人間というのはちっぽけな存在であり自然の循環の中では無力な存在であると感じ」たこと、そして今後自分が日本で生活していくにあたって「地球のため、ひいては我々の子供のその子供のその子供の為に無駄であったり不必要なものは切り捨てていかなければならない」と感じたことで感想文をしめくくっている。また B さんの場合は、ツアー前の気持ちとして「何か違うモノをこの研修を通じて感じたいという気持ちを自分の中で密かに持っていました。」と記述している。そしてこれからの生活の中で「何かこれだけはというこだわりを持って仕事や生活を通じて頑張って行こうと思っています。」と述べている。参加者たちの間には、エコツアーに参加するということは、前もって「意気込み」をもち、参加後には「気づき」や「変化」があるものだという暗黙の前提があるようである。

さらに内山（2002）は、感想文に見られた型を参加者どうしの会話と比較している。会話は、ツアー参加者が帰国後約２ヶ月経ってから、お互いが撮った写真を交換するという目的で再び集まり、一緒に食事をしたときの会話を参加者たちの同意を得て録音された。分析の結果、感想文で多く触れられる話題と、会話で多く触れられる話題とに差異があることが見いだされた。まず感想文では、自然について触れる頻度が会話の場合よりも目立って多かった。次に、会話ではよく話題になる観光地のことや、おみやげのことについては、感想文では、全く触れられることはなかった。確かにエコツアーの感想文の中で、「２日目の北京観光で見た天安門広場の大きさに感激した。」というような感想は書きにくい。仮に当人にとっては沙漠の広さよりも、天安門広場の広さの方が印象に残っていたとしてもである。実際、会話の中では、圧倒的に観光地でのことや、土産のことが話題になることの方が多かった。それにもかかわらず、「エコツアーの感想文」を書く段になると、観光や土産について書いた人は一人もいなかった。それは、こうした話題が「エコツアーの感想文の型」から外れる、「不適切な」話題であると考えられているからだと結論づけた。

確かに、エコツアーで何を感じる「べき」かといったことは、すでに言説として流布している。例えば、「エコツアー・完全ガイド」（地球の歩き方編集部，1998）によると、

エコツアーに参加すれば、「日常生活とはまったくかけはなれた大自然に触れ」ることができ、「日常の生活では考えられない、一生に一度の体験」をしたり、「自然や地域のために活動しながら視野を広げ」たりできるという。参加者には、エコツアーへの参加を通して「環境保護について学びながら自然の豊かさを楽しむ」「その地域への関心を高めることができる」などのイメージが提供されているわけである。

実は、「エコツアーという体験」が実体としてそこにあるわけではなく、「エコツアーという体験」を振り返る行為があるだけである。しかし、「エコツアーの感想は？」と尋ねられると、参加者たちは「感想文の型」にはまった感想を述べる。型に関する考察は次節で行うこととし、ここでは、内山がエコツアー参加者の語りに型があることを見いだしたことだけを紹介するに留めておきたい。

4．ドミナントストーリーの増殖

ここまで見てきたように、体験の語りは、「語るに語り得ないもの」を内包している。従って、語りが他人からの承認を得て安定するためには「語り得ないもの」が集合的に隠蔽されなければならない。その隠蔽のために用いられる技法のひとつに語りの型（ドミナントストーリー）があった。ドミナントストーリーとは、ある社会・文脈の中で受け容れられやすい（自己）物語が定型化したものである。この定型的な物語を利用することによって、語り手は自分の物語にあるパラドクスをうまく隠蔽し、容易に他人の納得を得ることができる。しかし反面、自分の体験を既成の型にはめることによって、語り手の体験の独自性・かけがえのなさは失われ、どこにでもあるような出来事に置き換わってしまう。本稿を閉じるにあたり、本節では、グループ・ダイナミックスにおいて、ドミナントストーリーに着目することの含意を整理しておこう。

まず、理論的な含意を整理する。社会構成主義に対する批判の一つとして、現実が社会的に構成されるならば、いかなる現実をも社会的に構成することができてしまうのではないかという反論がある。もし、この反論が成立するならば、例えば、歴史修正主義などは無条件に承認されてしまう。しかし、社会構成主義は、なにもあらゆる現実が好きなように構成されると主張しているのではない。例えば、高層ビルから落下すれば確実に死に至るのであって、それを死とは認めないといった「現実」を構成してみても、それは端的に意味がない。物理法則は物理法則であってそれ以上でも以下でもないからである。こうしたいわば不毛な詮索に対して、本研究で触れてきたドミナントストーリーは、反論の橋頭堡の１つを築くことに貢献する。すなわち、ドミナントストーリーの存在によって、ある文脈における出来事に関する特定の解釈は、端的に意味をなさないストーリーとして関心の圏外に放擲される。ドミナントストーリーにこそ、特定の社会・文化が刻印されているからである。言い換えれば、特定の出来事や解釈は、集合的に妥当とされたり、非妥当とされたりすることになる。すなわち、ドミナントストーリーが

ドミナントであることは、集合性が支えているのである。

無論、集合性に支えられたドミナントストーリーは、諸刃の刃である。ドミナントストーリーに回収される語りは、聞き手に理解され、場合によっては人口に膾炙することになるが、ドミナントストーリーに回収されない語りは、ドミナントではないというただそれだけの理由で無縁圏に遺棄されてしまうからである。しかも、何がドミナントになるかどうかは、歴史的、社会的、文化的文脈に支配されるからである。

ここに実践的な問いが成立する。すなわち、ドミナントストーリーに回収されない語りを顕現させようとするにはどのようにすれば良いのかという問いである。例えば、「語れば語るほど個的な領域が解体してしまう不安定な発話」（冨山, 1995）としての戦争体験の語りや、従軍慰安婦の語り、それに、筆者自身も語るほどに虚しいと感じる自身の震災体験の語りを伝承するような場合である。

ここで比喩に過ぎないが、ある特定の現場に関する一連のドミナントストーリー群を様々な個別体験を変数とする連立方程式だと考えてみる。ここで変数の数よりも式（ドミナントストーリー）の数の方が少ないとする。この連立方程式の解は不定である。特定の体験を（式を解いて）取り出すことは不可能である。この比喩は、体験を知ろうとするときに、式を増やすことが有効であることを示唆している。従って、実践的には、ドミナントストーリーを開き、多種多様な語りを開発し、許容することが求められる。このことによって、体験の語りから、個別の現場体験を解き明かす可能性が示唆される。

最後に、ドミナントストーリーがもつ方法論的含意に触れておこう。ドミナントストーリーは、フィールドワークにおける聴くことの意味と技法を再検討する契機となる。ドミナントストーリーは、語るに語り得ない体験を語る際に他者の承認を得やすくする１つの手がかりであった。承認のゲームに参加するフィールドワーカーとして、例えばいつルールの変更を申し立てるのかといった考察が必要となろう。ここでは、ドミナントストーリーを単位とした多声的分析の可能性を探ることを提案しておきたい。バフチン（1963/1995）に依拠した多声的アプローチにおいて、発話ではなく、ドミナントストーリーを単位とすることによって、いわば一人一人の声ではなく、パートとしての声部のダイナミクスが分析できると思われるが、これはこれからの課題である。

今後は、可能な限り、多様なストーリーを想定して、当事者の傍にあって微弱な語りにも耳を傾け続けるべきである。翻って考えてみれば、これは、ボランティアの基本姿勢ではなかろうか。

5．おわりに

阪神・淡路大震災から10年を前に、語るに語り得ない、言葉にならない想いを語り伝える必要を感じる。今後は、震災体験の語りを既存のドミナントストーリーに回収されないように警戒しながら、丁寧に拾い上げていくことが必要であろう。そのためには、

単に実践的な文脈を導入するだけでは不十分であり、語りが集合性に支えられていることを改めて確認し、その様態をさらに理論的に展開してこそ実践的な展開が可能になる。まさに、「よい理論ほど実践的なものはない」のである。

注

1）本文で紹介している研究（森崎，2002；内山，2002）は、著者が卒業研究として指導したものである。これまで著者は、その一部を本人の承諾を得て学会で発表（Atsumi, 2002a；渥美，2002b；渥美，2002c；Atsumi, 2003b）してきた。本研究は、新たな視点を加えてこれらを統合したものである。

2）「現場に行かなければ何もわからない」とか、「現場に行っても、理論がないと理解できない」といった皮相的な議論にはもはや囚われる必要はあるまい。

3）本研究では、語りという言葉を最広義に解釈しておく。「語り」という用語の周辺には、類似するいくつかの用語があり、論者によって多様な使われ方がなされている。例えば、語りが、物事を語るという発話行為として捉えられる場合もあれば、語られた事柄としての物語を指す場合もある。また、語りが様々な言説（discourse）の１つであると言われる場合があるが、今度は、discourse という語が、イデオロギーとしてのディスクールと対応する場合もあれば、談話と訳されて主に談話分析の場面で使われる場合もあるといった具合である。そこで本研究では、各立場にある論者間の議論に立ち入ることは避け、様々な言説一般を語りという言葉で代表させることにする。従って、本研究における語りとは、言語の発信と発信されたものを包括する概念として大雑把に捉えたものである。具体的には、発話、会話、対話、談話といった、通常、発声を伴う言語行為も、手記、体験記、感想文といった書かれた言葉も、さらには、言葉を発する行為、文字を書く行為などを包括する。

4）本研究は、平成13年度科学研究費基盤研究 B（代表）および平成13年度防災科学技術研究所特定プロジェクト（分担）の研究成果の一部である。予備分析結果は、森崎偉子の卒業論文として大阪大学人間科学部に提出された。

5）本研究は、平成14－15年度証券奨学財団研究助成（代表）の研究成果の一部である。予備分析結果は、内山志保の卒業論文として大阪大学人間科学部に提出された。

6）活動理念は、「環境問題を生活者の視点から考え、日々の暮らしの一部として取り組む」、および、「自然の循環を基盤とした、真に豊かな社会と生活のスタイルを創造する」である。
http : //www.ecostyle.net

参考文献

浅野智彦　2001　自己への物語論的接近：家族療法から社会学へ　勁草書房

麻生武　1996　ファンタジーと現実　金子書房

渥美公秀　1996　グループ・ダイナミックスとデータとしての会話－問題の所在－実験社会心理学研究, 36, 1, 142-147.

渥美公秀　2001　ボランティアの知：実践としてのボランティア研究　大阪大学出版会

Atsumi, T. 2002a Unnarrated experiences among volunteers active in disaster. The 25th International Congress of Applied Psychology. Singapore.

渥美公秀　2002b　語るに語り得ない体験について⑴－阪神大震災・東海豪雨水害に参加した災害ボラ

ンティアの事例　日本心理学会第66回大会　広島大学
渥美公秀　2002c　語るに語り得ない体験について⑵－中国内蒙古自治区への現地ツアーに参加した人々の会話および感想文から　第４回国際ボランティア学会　大阪 YMCA
渥美公秀　2003a　ボランティア研究の展開－物語の設計科学に向けた議論　ボランティア人間科学紀要, 3, 7-16.
Atsumi, T. 2003b Unnarrated experiences ⑶: Implications for group dynamics. 日本グループ・ダイナミックス学会 第50回大会
渥美公秀　2003c　記憶の伝承に関するグループ・ダイナミックス　大阪大学21世紀 COE「インターフェースの人文学」報告書
Atsumi, T. in press Socially Constructed Motivation of Volunteers: A theoretical Exploration *Progress in Asian Social Psychology*.
渥美公秀・加藤謙介・矢守克也　2003　ペット型ロボットを用いた活動に対するグループ・ダイナミックス的考察⑴: VTR 分析手法の開発　第67回日本心理学会大会論文集
バフチン　1934-35/1996　小説の言葉　平凡社ライブラリー
バフチン　1963/1995　ドストエフスキーの詩学　ちくま学芸文庫
Bruner, J. 1986 *Actual Minds, Possible Worlds.* Cambridge, Mass: Harvard University Press. 田中一彦訳　可能世界の心理　みすず書房　1998
Bruner, J. 1990 *Acts of Meaning.* Cambridge, Mass: Harvard University Press.
地球の歩き方編集部　1998　エコツアー・完全ガイド　ダイヤモンド・ビッグ社
Greemhalgh, T. & Hurwitz, B. *Narrative Based Medicine: Dialogue and Discourse*　斎藤清二・山本和利・岸本寛史 監訳　ナラティブ・ベイスト・メディスン: 臨床における物語と対話　2001　金剛出版
浜田寿美男　2001　自白の心理学　岩波書店
星子ユリ　2001　現代社会におけるボランティアの動機－バタイユの＜消費＞概念からの考察　平成12年度大阪大学人間科学部卒業論文
加藤謙介・渥美公秀・矢守克也　2003　ペット型ロボットを用いた活動に対するグループ・ダイナミックス的考察⑵: 有料老人ホームにおける RAA に対する VTR 分析　第67回日本心理学会大会論文集
McNamee, S. & Gergen, K.J. 1992. *Therapy as Social Construction.* New York: Sage. 野口裕一・野村直樹 訳　1997　ナラティブ・セラピー: 社会構成主義の実践　金剛出版.
松島恵介　2002　記憶の持続　自己の持続　金子書房
Middleton, D. & Edwards, D. 1990 *Collective Remembering.* London: Sage.
御厨貴　2002　オーラルヒストリー: 現代史のための口述記録
森崎偉子　2002　災害ボランティアの「語り」に関する一考察　平成13年度大阪大学人間科学部卒業論文
中野卓・桜井厚　1995　ライフヒストリーの社会学　弘文堂
西宮ボランティアネットワーク　1995　ボランティアはいかに活動したか　ＮＨＫ出版
「思いがひとつに」編集委員会　2001　思いがひとつに: 東海豪雨ボランティア活動の記録　「思いがひとつに」編集委員会
大橋靖史・森直久・高木光太郎・松島恵介　2002　心理学者、裁判と出会う－供述心理学のフィールド　北大路書房
桜井厚　2002　インタビューの社会学: ライフストーリーの聞き方　せりか書房
Thompson, P. 2000 *The Voice of the Past: Oral History.* 3rd edition. Oxford University Press. 酒井順子訳　記憶から歴史へ: オーラルヒストリーの世界　2002　青木書店
冨山一郎　1995　戦場の記憶　日本経済評論社

内山志保　2002　語り得ぬ体験に関する一考察　平成13年度大阪大学人間科学部卒業論文

渡邊としえ　2000　地域社会における５年目の試み－「地域防災とは言わない地域防災」の実践とその集団力学的考察　実験社会心理学研究, 40, 50-62.

Wooffitt, R. 1992 *Telling Tales of the Unexpected : The Organization of Factual Discourse.* Harvester Wheatsheaf : Prentice Hall　大橋靖史・山田詩津夫 訳　人は不思議な体験をどう語るか : 体験記憶のサイエンス　1998　大修館

やまだようこ 編著　2000　人生を物語る : 生成のライフストーリー　ミネルヴァ書房

Group Dynamics of Narrative : Unnarrated Narratives of Experiences.

Tomohide ATSUMI

Research on narratives of one's own experiences carries fruitful implications for group dynamics. The present study reviews the narrative research and explores its theoretical, practical, and methodological implications for group dynamics. Research based on group dynamics is supposed to identify not only how a particular phenomenon is collectively constructed, but also how we could change it in a practical way. The present study first confirmed that narratives are collectively pursued. Second, it identified some types of dominant stories（i.e., narratives which a society accepts）in narratives on various issues. It was suggested that, in terms of dominant stories, the society select particular issues that are supposed to be kept restrictedly silent. Hence, when we listen to people forcing themselves to express or confess their own painful experiences, for instance, it is important to help construct another story even if the narratives can't find a proper dominant story. The equation metaphor indicates that adding another dominant story increases the number of equations, which leads to solve the set of equations, that is, to understand unnarrated experiences.